

ることに小田川の増水や、岩木川からの逆流などで、せつかく築いた堤防が決壊と言う悪条件で、その度に河川の流れが変り、水田が川底になったり、押し流された。

血と汗の滲む様な苦勞の甲斐も無く、幾度となく失敗が繰り返され、金木代官では日夜頭を痛め、散在して居る他国から募った人達を、今の嘉瀬派立に作業小屋を立て寝泊させ、人夫には工事分担当を割当てた。

それ以来河川の工事は以外と進み、三七五〇米の小田川の開発工事は、延宝年間からの構想も数十年と言う長い年月で、元禄中期の十一年には河川（小田川）に通水し、遂に完成した。

地域農民の喜びは例え様も無かったが、それでも毎年の如く岩木川の増水や降雨時には氾濫、小田川・十川の堤防が決壊し、水田は大洪水と化した。その後も幾度と無く再改修した。

他国人が小田川掘削堤防工事に率先協力し、立派に工事が完成して、解散の機運になったが、人間模様は千差万別で有り、故郷に帰散する人、また残留した人々は小田川河川補強工事や、水田に『しがみつき』永住したが、余命いくばくもなく露と消えた人々も多々あったが、遺体は無縁仏として、派立の俗に言う『工藤の墓』に丁重に葬ったと言ひ伝えがある。

何れにせよ、大昔からの嘉瀬の水田は、小田川・旧十川・飯詰川の決壊の水害や、旱魃・冷害で不毛の地と言うべき湿地帯を、此処まで開発するには用水・排水・灌漑などの水利事業の

効果が絶大なものであるが、現在の嘉瀬の集落を形づくった祖先の英知は偉大なものであり、吾々が今、茲に生存して居ることとは、祖先の艱難辛苦の賜であり、改めて『古きを尋ねて新しきを知る』ことができる。

津軽藩では、新しく拓いた土地の集落ごとに、何々派立と名付けていたが、明治二十二年（西一八八八）に町村制が公布され、嘉瀬も行政上、集落内は実施されたが、派立では藩政時の嘉瀬派立の名残りを町内名に、派立と名付けたと言う説である。

## 打続く凶作

嘉瀬は六百余町歩の水田を有していた。農家の命の糧として耕作している水田が、不思議にも幼穂形成期から、出穂開花期にかけて豪雨が降り続き、岩木川の水流が逆流して、小田川・旧十川・飯詰川が満水となり、堤防決壊が三年に二回は必ずあった。

嘉瀬の水田六百余町歩余りの内、三分の二の三〇四町歩は、その度毎に冠水し、田圃一面は泥の海と化し、冠水は三日一週間も居座り、春から秋まで吾が子同様に愛情を持って育てた稲は、一瞬の水害で全滅し、百姓は天を仰ぎ、憎むにも憎めず泣くにも泣けぬ悲惨さであった。それでも喰う為の糧として稲刈りをするが、冠水の水田は、整粒は一粒も無く『ズダ米（屑米）』が、少量穫れるだけであった。

無作の常習災害地帯であった。

（大正から昭和初期迄の凶作）

- ◎大正二年（大凶作）      ◎昭和六年（大凶作）
- ◎大正五年（四分作）      ◎昭和七年（大水害）
- ◎大正十二年（凶作）      ◎昭和九年（冷害大水害）
- ◎大正十一年（五分作）      ◎昭和十年（冷害大水害）
- ◎大正十三年（凶作）

昭和十年以降も私の記憶では、冷害大水害等が数十回あったが、記憶に新しく生々しいのは、昭和五十五年と平成五年が皆無作であった。

この間に小作人の下層の水田は、堤防決壊が無い年でも、小田川から流れる暴れ水が、堤防内の『内水』で毎年の如く冠水した。

往事は無機質肥料が無く、有機質肥料だったから、反収は豊作でも四〜五俵だった。その内地主からは年貢米を搾り取られ、貧農の小作人は明日の糧にも事欠き途方に暮れ、喰うや食わずで草根木皮、喰える物は何でも食べ、露命を繋ぎ凌いだ。

貧農の小作人は地主に対しては総て受け身で、地主の搾取と圧力に抵抗する事なく耐えるのみであった。

小作人の貧農は、百姓だから当り前と諦めて、喰えなくなる娘や息子を売った。

凶作の年は嘉瀬からも、十二才〜二十才前後の花の蕾の娘達

水田が冠水した稲の刈取りは遅れるので、季節外れの霰や雹が降り、田圃一面が赤くなる程に『ズダ米（屑米）』が脱粒し、『ツマゴ（藁靴）』を履いて、稲藁株を刈取った年も多々あった。また刈取った稲が堤防の決壊で、ごっそり冠水の為に流出したり、泥に埋没する事も多々あった。極端であるが雨が三粒降ると、小田川の上流からの『暴れ水』は、冷コ水町内の一部が床上・床下浸水で、町内の人々は心配したものである。

小田川上流からの暴れ水で、小田川の堤防が満水になると、古町の道路上が水びたしになり、必ず小田川・旧十川・飯詰川の何処かの堤防が決壊し、必ず半鐘が乱打されるが常である。その度毎に村人や水防団・消防団が出勤して、水害を僅少に食い止めんと、土囊で堤防の補強に奔走したもので、村の婦女子等は『炊き出し』にかり出された。

私の脳裏から離れないのは数え年の十才、昭和十年八月の真夏だった。その時は雨が四日〜五日も夜となく昼となく降り続き、小田川・旧十川・飯詰川の堤防が決壊、六百余町歩の水田は冠水し、嘉瀬清久溜池の堤防岸まで満水し、水田は泥の海と化し、『ハダギ（バツタ）』が土手や草原一面に群浮して居た。

又、村では農家の窮乏を多少とも救おうと、役場前で救済事業に炭から澱粉を採る作業に日雇いとして、老若男女達が働いた。この様な事が三年に二回は必ずあり、嘉瀬の水田は皆

が、小さな風呂敷包みを持って、家の入口の前で、家族が泣きながら見送り、水商売や紡績工場、其の他に口減らしと、金銭の為に売られたが、娘達の大半は満期が来ても、故郷に帰る事なく、倫落の果てに身を沈めて不幸な一生を送った。

又、男達も借子は勿論、北海道・樺太・カムチャッカ・蟹工船に雇人夫として身体を売り、なかには生地獄の『タコ部屋』に命を落とした不幸な人々も多々あったと言うが、それは貧農の小作人が大半であったと言う。

## 小田川ダム完成

ひと雨降るごとに小田川は決壊し、又内水で水田は冠水した。雨が降らぬと早魃で水田は用水不足で悩み、毎晩毎晩夜水引きに悩まされた。自然の天候を待つより方法がなかった過去の農業も、小田川上流に『ダム』を造ったことよって解消された。このことは昭和二十八年町の活性化につながるものとして関係官庁に陳情し続けた結果、昭和四十一年から七ヶ年継続事業として着工の第一歩を踏み出した。

この総工事業費二十五億とされ、水源事業は国営六〇%、排水事業は県営三〇%、圃場(水田)整備、暗渠、排水、客土(湿地解消)は団体営一〇%で、昭和四十九年迄には附帯施設を仕上げ、計画通り完成をみた。

小田川ダムの完成に伴って、小田川の蛇行も改修補強、川中

拡張によって、嘉瀬の水田は冠水や早魃から解消され、基盤整備の農道をトラックもコンバインも縦横に走る農村風景に変わったのである。

## 「津軽弁 笑い話」

### 花嫁道具

秋晴れの昼、授業を終えた女子中学生たちが、教室から「ワァー」と校庭に走り出た。

チャカシコのとしこ、松の根っこにケツメギ、腹ツデ、ワツタド、オケタ。これを見ていたオマセのかなこ。

「としこア、嫁道具ば、壊したべ」

「ワ、まだ箆筒も鏡台も持ってネエジャ」

「それほど、強くオケレバ、嫁道具壊いだに決ってるべ」

とニグランド笑ったが、としこには、

何のことも、わからなかった。

その夜、としこは母親に尋いた

ら、

「ナンダカンダ、サベルモンデネエ」

と叱られた。

(チヨ)



## 俗諺「タガレ」表現考

木下俊蔵

津軽の言葉のなかに、「タガレ」と発音する言葉がある。これは、もちろん津軽弁であって、「タガレ」の発音の音程は、三字音の中で、「レ」の発音が前二字の音程に対して、二度位高音にしないと、生きた津軽弁の言葉にならない。

ただ、「タガレ」と言うだけでは、何のことだか、あまり意味がないが、「タガレ」と言う文句の前に、何々「タガレ」と云うことになれば、俄然「タガレ」の言葉が息を吹き返してくるから面白くなる。

「タガレ」は接尾語に属するものと思われませんが、あまり良い言葉として使用されない、むしろ差別と侮蔑を込めて、またちよつとした羨望も含めて、かぎりない蔑しみの言葉として、相手ないしは、第三者にぶつつける言葉でもある。

だが、この「タガレ」の言葉も、時代と共に経て、時を交えるごとに、津軽の人々の言葉から消え去られるようになった。

また「タガレ」の簡便化した言葉に「タガッテまたね」と云えば、「タガレ」の変化言葉としての、「タガッテ」は接尾語ではなく、むしろ主語に近くなる。

私達(主に明治・大正・昭和生れの)が小さい頃は、「タガレ」

の言葉は、津軽弁の実用語として、よく使用されたものである。

口喧嘩した時とか、相手も二・三人、こちらも二・三人の喧嘩で罵り合う時などは、お互いに対峙して叫び合い、最悪の口調で、「何々タガレ」と口汚く、早口で捲くし立てる方が、勝者になったみたいのようである。

「タガレ」と云う語音からして、似た言葉に「タガル」「カダレ」(津軽弁に参加する)、「オゴル」等、「ラ行」の発音がでてくるのが面白い現象である。

では、「タガレ」のつく言葉が、どれくらいあるか、思いつくまま列挙してみると、

- 一、もろごタガレ(耄碌タガレ)
- 一、くそタガレ(糞タガレ)
- 一、ばがタガレ(馬鹿タガレ)
- 一、めくそタガレ(目糞タガレ)
- 一、びろタガレ(涎タガレ)
- 一、あがタガレ(垢タガレ)
- 一、しらみタガレ(虱タガレ)

- 一、びんぼうタガレ（貧乏タガレ）
- 一、よくタガレ（欲タガレ）
- 一、ほどタガレ（乞食タガレ）

以上で、もつとあるようであるが、十個の語句が現れてくる。私なりに一つ一つ解説してみました。

まず、最初の「もろごタガレ」は、人間誰しも加齢とともに、物忘れがひどくなり、老化現象の一つとして耄碌（おいぼれ）になるのは、止むを得ない行程と考えられ、だが人によっては目を閉じるまで、健常者以上の明晰な頭脳を発揮している人もある。

「くそタガレ」は健康体であれば、垂れることはまずないが、今は末期を自家で迎えることは少なくなつたが、昔は違つていた。五十年代後半か、六十年代半ばで、この世と別れを遂げた時代



頭じらみを除くには、目の細かい梳き櫛で髪を梳くと、取り除くことができた。昭和二十三年頃風の駆除剤として、DDTなる薬剤が始め、この薬を散布することによって虱・蚤等は完全に駆除され、姿を消したのである。

「びんぼうタガレ」は、精神的にも、物質的にも、まさしく貧乏で乞食の一步手前のように見られたものである。それでも自給自足で暮らした時代であれば、物を分け合い、助け合いを是としたことによつて、生き存えることができた。

「よくタガレ」は自分の物を、物惜しみするだけでなく、他人のものでも欲しいという気持ちが旺盛で、転んでもタダでは起きない型で、道路に落ちている馬糞でも掴むという心理をもっている人などが、当てはまる。

最後の「ほどタガレ」は、ほどはほいどの略語で、津軽では乞食のことを「ほいど」と呼んでいた。「ほどタガレ」は現在でも一般的に通用する言葉だが、財産もお金もあり余つていても、お金を出し惜しみするだけではなく、他より一円でも多く奪い取ろうとする根性を持つているから、自分さえ良ければという考えの生き方で、正面からはともかく、裏からは歓迎されない種類の人である。

〓 〓 〓 〓 〓 〓

以上でもつて「タガレ」のつく言葉を考察してきたが、この「タガレ」も一つの方言である。

であれば、どこそこの爺様、婆様が床に付いた（病に臥せる）と云われれば、半年位で死んで行くのであるが、その間の看病として、常に傍に付いていられるわけではないので、糞まみれになつても不思議ではなかつたのである。特に農繁期に於いては、こまめに手を掛けられないのである。医者としてひと月に一回か二回の往診を頼む程度で、事を済ませた。戦後診療所が近くにある場合は往診を頼む回数も多くなつてきた。

「ばがタガレ」は、本来のそれは別として、普通の考えの人が常軌を逸した行動をとるとか、とんでもない考えによつて、他人に迷惑を与え、不愉快な思いをさせることなどを指して云う言葉である。津軽では「ばがタガレ」だが、中央（関東・関西方面）の方では、「ばかタレ」と呼んでいる。

「めくそタガレ」はトラホームに罹患した子供や、焚火で煮物や暖をとる生活をしていた家庭では、目尻に目やにを溜めることを目糞と云つたものである。

「びろタガレ」は病的なものか、悪習慣のせいかな、常時涎を流している状態で、あまり格好のよいものではなかつた。

「あがタガレ」と「しらみタガレ」は、貧しさゆえの産物のひとつだが、風呂の無い家庭では、垢と虱のたがる傾向が多くみられ、どこの部落でも八割位は風呂の設備が無い家庭であつた。虱の中の頭じらみは、男の子は坊主頭だから寄り付かないが、女の子には頭じらみの持ち主が多かつたものだ。不潔にしていると、頭を手でポリポリ搔くと、虱が落ちてくるのである。

津軽言葉・南部言葉・弘前言葉と、言葉のアクセントもそのところの土地よつて、それぞれ異なつて、独特のニュアンスがあるようだ。

私達が住む津軽にも文学の無い縄文時代から言葉（方言）があつた筈、青森県は日本海側と太平洋側とは、言葉の発音に大きな違いがあるようだが、わが「かたりべ」の会でも、会員一同が一堂に会して、言葉（方言）はどこから伝播されてきて、津軽独特の方言が形成されたものか、自由闊達私見を論じ合つてみたいものである。（私思うに、津軽言葉に天皇家の宮廷言葉の流れの果ても入つて来たのではないか。西郡越水地区に天皇山と云う名の山がある）



嘉瀬の語ッコ  
人生百歳

第二次世界大戦（大東亜戦争）以前の百姓は、人生五十年が節目で、早死する者が多かつた。五十才代で腰が曲つてくる者も珍しくなかつた。

人の背で荷物（稲の背負運搬）を運ぶ農作業から解放されたのは、農作業に機械が導入されて来た、昭和時代も終りからであつた。今は人生百才も夢でない。（あきもと）

# 芦野開拓団(大東ヶ丘)の六十年

葛西敏江

今年(平成十七年)二月十日に父竹内千代作(満九十五歳。明治四十三年生まれ)が入院したため、衣類等を少し整理しようと思ひ、古ぼけた筆筒を開けると一番上の引き出しから小さな黒色の手帳(縦十五センチ横七センチ)を見つけた。いったい何を書いているのかと読んでいくと、芦野開拓団員として開墾に精を出していた頃のことを思い出しながらメモしたものだど理解できた。そして六十年前に父と一緒に原野を開拓した人達も、今では数人しか生存していないことに気がついたのです。

## 引揚者帰農開拓団

(仮称上町地区 分校付近より上二十七戸)

昭和二十一年太平洋戦争も終わり敗戦国民となったため、多くの日本人が内地(国内)、外地、満州、樺太などからこの青森県北津軽の金木町にも引揚者として帰ってきました。

父も二十一年四月初め、母の兄が藤枝に住んでいて、その兄の勧めもあって開拓団員として横浜市保土ヶ谷から入植した。

そのころの町長は大橋忠雄氏で、開拓団長となり率先し、農

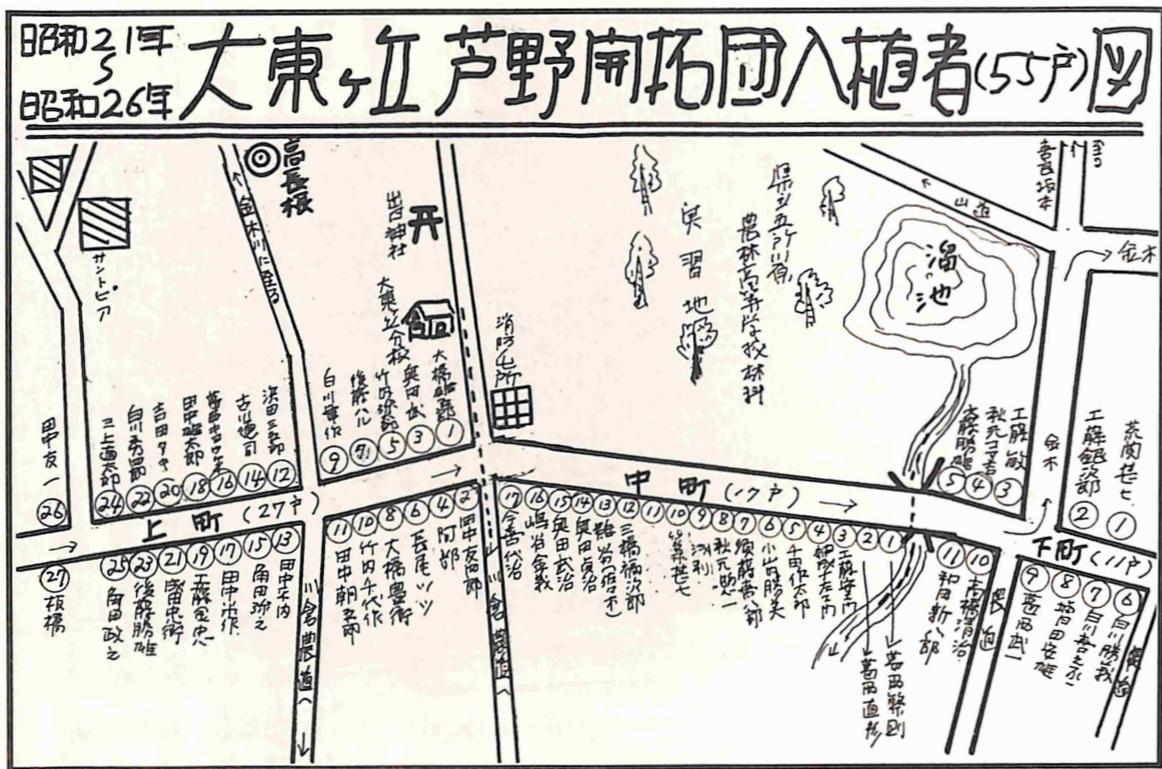
地一町五反前後と山林八反ほどを入植希望者に配分決定。数日後町から若い測量技師が来て、その手伝いを頼まれ父と田中雄太郎氏、田中朝五郎氏と四名にて原野を歩き、大きめの木を見つけると印をつけて歩き回り、測量の手伝いをしたとメモ書きにあった。病床の身であるが、父も話してくれた。木々の下をくぐって歩き何日もかかった。配分された原野は、山、谷、沢があり、開墾には大変困難な立地条件の悪いところだったのである。同じ年、墓地も中町の今喜代治氏の裏地に五十戸配分している。(七尺×十尺ほど)

数日して隣村厚生部落へ父や田中雄太郎氏等数名で見学に行った。厚生部落は戦前の昭和八年に入植し、もうすでに広々とした農地が開けていた。自分たちもこれに続くのだと希望を

持つて帰路についた。見学者たちはこれから開拓する自分達にどんな試練が待っているのか気づくことはなかった。

二十一年夏頃より田中雄太郎(町内)、田中朝五郎(蒔田・満州)、大橋勇五郎(町内)、竹内弥太郎(藤枝)、三上直太郎(船越)、吉田タキ(満州)、竹内千代作(父、横浜)の七名が、それぞれに配分された土地開墾一つで耕し、原木を窓鋸で切り、平地を作り、そこに四本柱で二間×二間のノマ小屋を各自が作った。しかし厳寒地で越冬したのは、私の父の家族五人(母、姉、弟、私)と独身者の舟越出身三上直太郎だけだった。他の五名は実家や、吉田タキさんは農場で一冬過ごしたそうだ。そのころ引揚者たちを弘前大学金木農場に集めて、落ち着き先を見つかるまで一時支援が続いていたのである。父のメモによるとノマ小屋の生活状態は小屋の中に板もなく切り倒した松の木を枕木にし、松葉の付いた枝を束ねて敷き詰めた上に筵・こもをかぶせて、寝床にした。土間からの冷気は言葉にならないほどだったし、薪も生木を燃やして暖をとることしかできなかった。また、灯もなく大きめの井に食用油を注ぎ灯りにして、厳寒の越冬をし春を迎えた。

二十三年五月頃に田中平内一家が満州から、後藤勝雄、後藤ハル等樺太から順次入植者が集まり、上町二十七戸の家族世帯持ちの部落となる。二十三年の春頃に青森県の支援により住宅建設始まる。二間×五間の平屋だった。屋根と外柱だけの建物である。父や近所の男達が助け合って葦で壁下地を組縄で作り、



土をこねて壁塗りをし住宅の仕上げにかかった。井戸も各家で助け合いながら庭先に掘った。まだ電気はなくランプで灯をとった。ランプのホヤ磨きは子供たちが手伝われた。この年の六月二十日、弟の敏が旅立った。一歳三ヶ月であった。戦時中の昭和十九年、弟功に続く不幸に父は頼みの男の子を失うことになり、心痛はどれほどだったろうと思うと今でも胸は熱くなる。二十三年秋頃にやっと待ち望んでいた電気が灯った。二二個だけの裸電球が居間と寝室を明るく照らした。

## 食糧増産隊開拓団

(仮称中町地区青年隊) 十七戸

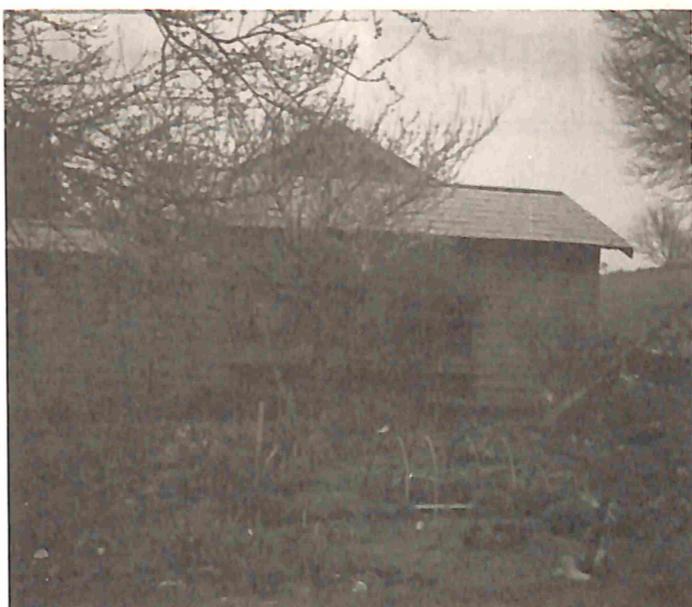
父の記録を見ると昭和二十一年西北五地区二、三男を対象に青年達を募った。独身の若者ばかりの集団であった。(世帯持ち奥田武治、葛西繁則)

入隊者の一人で開拓団長をされた佐々木男治氏の寄稿

## 偲ぶ 懐かし 思い出深し

昭和二十一年五月一日金木町修練農場に青森県庁が募集した開拓食糧増産隊が開拓団研修生として入所。二十一年の三月に大々的に募集したのである。昭和二十一年四月一日、隊員達は当時青森県三本木町(現十和田市)の元陸軍の軍馬補充部隊の兵舎であった所に、青森県の募集に応募した食糧増産隊が約百五十名ほど集結した。ほとんどの人々は元陸軍の軍人であった。

北郡より二十六名が来ており、県全体で二百名が毎日毎日開墾開拓の訓練に励んだ。訓練は厳しいもので逃げ出した隊員も数多くあり、厳しい日々が続き大変苦労した。訓練の約束期間は一ヶ月だったので隊員達は厳しさに耐えて我慢した。そろそ



入植者の住宅(昭和30年 写す)

ろ訓練期間の終了が近くなると今後はどうなるのかと隊員達が不安がったが、開墾地を有する市町村の有志の方が迎えに来るので心配ないとのことであった。

他の郡、市町村ではすでに迎えが来だした。北郡の隊員が首を長くして待っているところに、同年四月二十五日頃、北郡金木町の有志である川端町の大橋勇五郎氏が来て、突然大声で「北郡の隊員全員食堂に集結せよ」と叫ぶ。待ち望んだ北郡の隊員が集結するのを前に、木箱の上に立った彼は威勢良く次のよう挨拶をした。



葉煙草を小屋に運ぶ父(昭和40年写)

北郡の隊員の皆様、本当に御苦労様でした。今日現在の日本はアメリカとの戦に敗れて、事実上日本はつぶれたのだ。隊員の皆さんは皆元陸軍の軍人でアメリカと戦った立派な方々です。決して皆さんが弱くて負けたのではなく、科学の力で負けたのだと力説した。集まった隊員からは万雷の拍手を受け、大橋氏は更に話を続けた。隊員達は真剣に話を聞いていて誰一人ヤジを飛ばすものも叫ぶものもない。大橋氏は金木町について語った。金木町では隊員の皆様が全員来てくださるのを心から喜んで迎えるつもりでいます。安心して金木に来てくださいと頭を下げた。金木町には青森県でも有名な芦野公園があります。隊員の皆さんが開拓開墾する予定の芦野大原野が広がっています。皆さんが鋤を入れる芦野の原野の近隣には喜良市村の坂本大原野があり、昭和八年より試験開拓村があり、すでに成果を上げて約四十戸の農家が入植生活をして昭和厚生村という名が付けれられ、現在では青森県内外よりたくさん人が見学に来ていたほです。また、金木町には多くの林檎園もあります。

大橋氏の力説に全員が感動し一日も早く金木町に行きたいと願った。先遣隊七名を派遣することを決定し、五月一日に彼らは金木町に向かった。

先遣隊員は今喜代治、佐々木男治、神成重左衛門、奥田定治、葛西甚七、奥田武治、小山内勝美の七名であった。彼らは五月一日に金木町修練農場内開拓食糧増産隊として入所した。この場所は旧農兵隊の解散後に、金木町修練農場内開拓食糧増産隊